「令和初の新年に思う」

新得町立屈足南小学校長　髙　充慶

あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします。皆様にとって、素敵な一年となりますよう心からお祈り申し上げます。

私事ですが、八十歳を過ぎた両親がいます。父は肺炎で入院、母は自宅で一人暮らし。そばに住む姉から十二月に連絡がありました。母の認知症がひどくて、ノイローゼになりそうだというものでした。母は十一月に転倒、右手を骨折。案外元気そうでしたが、それ以来、毎日のように「病院に連れて行け。救急車を呼べ」と姉に電話が入るというのです。年末に行くと、母は「全身が痛くて動けず、居間の床で一晩を過ごした」と言いました。慌ててケアマネージャーに相談し、施設に短期入所しました。ところが、年明けに検査すると、背骨などに圧迫骨折が見つかったのです。痛いというのは本当だったのかと申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。

目を閉じると、いつも勤勉な両親の姿が目に浮かびます。しかし、嫌いだからと風呂に入らず、姉に言いたい放題の今の様子を見ていると、自分の中の「何か」が一緒に壊れていく怖さを感じます。そして、一緒にいられる時間が、確実に少なくなっていることを実感しました。

先日、亡くなられた奥様が生前に作った「七日間」という詩を新聞投稿した方のテレビ番組を見ました。

「神様お願い　この病室から抜け出して　七日間の元気な時間をください

一日目には台所に立って　料理をいっぱい作りたい

あなたが好きな餃子や肉味噌　カレーもシチューも冷凍しておくわ…」

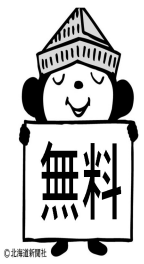
その詩には、七日間の平凡な毎日が綴られていました。しかし、その願いも叶わず、亡くなってしまったそうです。

「門松は　冥土の旅の　一里塚　めでたくもあり　めでたくもなし」

一休禅師の一句です。新年を迎えるということは、残された時間も減るということ。毎日、愛する人と過ごす日常の素晴らしさを噛みしめて過ごしたいと思いました。

道新電子版！
いつでも朝刊読めます！

スマホで！タブレットで！パソコンで！紙面を丸ごと読むことができるサービス、「どうしん電子版」！購読料プラス　0円



「どうしん電子版」は、道新を月決め料金で定期購読している方なら、無料で登録できる電子版会員限定のサービスです。

お問い合わせは

0120-889-104

こちら屈足駐在所

No8

佐藤和典　巡査部長

「緊急通報は110番相談電話は#9110」

110番は緊急の事件・事故などを、いち早く警察へ通報するための緊急電話です。

担当の警察官が、事件・事故の内容に基づいて必要な事項を質問します。

慌てず落ち着いて答えて下さい。

警察官が早く現場に到着できるよう、その場の住所や付近の目標となる建物などを伝えてください。

携帯電話で110番する場合、車を安全な場所に停止して通報をしてください。

緊急の対応を必要としない遺失物・拾得物の届出、諸手続に関する照会などは、最寄りの警察署、交番・駐在所の電話を、相談や警察業務に関する意見・要望は、短縮ダイヤル「#9110」の警察相談専用電話をご利用ください。

本

送料無料

当販売所では様々なジャンルの書籍、雑誌、文庫、新書、週刊誌の定期購読など、ほとんど全ての出版物を確実にお取り寄せします。

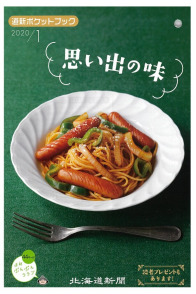
今読みたい話題作！欲しい本をお取り寄せ！

気軽にお問い合わせください。

通販は送料がかかりますが当販売所は無料です。

※当店取り置きとなります。宅配サービスは致しません。

道新一月号ポケットブックの御案内です。



▼ポケットブック一月号＝思い出の味。アンケート「あなたの懐かしい料理は何ですか？」に寄せられた回答をベースに、寄せられた声の多かった料理や、これからも伝えたい味などをピックアップ。「また食べたい料理」「わが家のカレー」「ふるさとの汁物」「あの日のおやつ」などを紹介します。

一部地域配布済み

次号予告

「いきいきレシピ」です。

お楽しみに。

ねっとわーく屈足　検索

ねっとわーく屈足電子版

ミニコミ紙「ねっとわーく屈足」が、パソコンやスマートフォンで動画も閲覧できます。

ツイッターも屈足の話題一杯毎日更新！

じじーakira1942　検索

連続小説

完走

赤池武臣

良太は五十メートル間隔に立っている電柱の間をきっちり五十歩で刻んだ。

秒速にしておおよそ三十秒。焦らず、落さずの基本を守りながら。（このまま、いけそうだ）

希望が見えてきた。と、その瞬間だった。

「びり、ひりっ」

と疼痛が良太の脇腹を襲った。　「くそッ」

良太は舌打ちした。

ゴールには冨士子が将っているのだ。何としてもこのまま逃げきらねば、冨士子も米一俵も絵に書いた牡丹餅になってしまう。

しかし焦れば焦るほど上半身が反り返ってしまってバランスをくずし足が宙に浮いた。

速度は急に落ちてしまった。うしろを振り返る余裕などない。何度も立ち止まらなければ走れない状態だ。

やがて、ひたひたと複数の足音が良太の背中にはりついた。と思う間もなく、集団は一気に良太を呑みこむと、あっというまに良太を置き去りにしてしまった。

「畜生」　貝太は思わずうめいた。

もう棄権しようかと考えたりした。しかし自分でそれを決意するにはあまりにも未練が多すぎる。

万が一、伴走車が後ろからつき当ってくれでもしたら、その理由になるだろうに。

（いや、やっぱり棄権などできない）　良太は頭をふった。

今、自分を抜いていった奴らだって一気に飛びだした俺が自信満々先頭を走る俺の背中をじっとみつめ続けながら、苦しさに耐えて走ってきたはずなのだ。やはり、ここで止める訳にはいかないのだ。もし止めてしまったら、今まで歯をくいしばって耐えてきたことは何だったのだ、ということになってしまう。

第二集団が過ぎ、そのうしろからぱらぱら後続の選手たちも良太の横を通り過ぎていった。ともかく今は、完走することだけを考えることだ。

残り三キロという辺りで救護の三輪車が横にぴったりはりついた。

良太はここではじめて自分が最後尾であることを知った。

つづく